〈研究論文9〉

新渡戸稲造における「修養」と「宗教」

森上優子

はじめに

近代日本におけるキリスト者のひとり新渡戸稲造（一八六二～一九三三）は、修養に関する著作を積極的に刊行している。それは、『実業之日本』を中心とした雑誌への掲載、ならびに『修養』（一九一一［明治四四］）、『世渡りの道』（一九一二［大正一］）、『婦人に勧めて』（一九一七［大正六］）をはじめとする修養書の刊行である。これらの修養書が刊行されたのは一九一〇年代を中心としてであり、当時は「時代閉塞」のなかで出現した「煩悶青年」に向けての修養に高い関心が払われた時代にあたる。新渡戸の修養に関する著作も当時のベストセラーとなっており、「煩悶青年」に少なからぬ影響を及ぼしたと考えられる。新渡戸の「煩悶青年」への修養言説の意義とは如何なるものであったのか。本稿では、この点について、彼の「修養」概念と「宗教」概念との関係性から探ってみたい。

一　「修養」概念

新渡戸は、『修養』において、「修養」概念を「修身養心」とし、次のように規定する。「修身」とは「克己なることが本となつて、肉体情慾の為に心を乱さぬ様、心が主となつて身体の動作又は志の向く所を定め、整然として、順序正しく、方角を誤らぬ様、挙動の紊れぬ様、進み行く意」（『修養』全七、二一～二二頁）であり、「養心」の「養」とは「各自の預つて居る、柔和な、少しく荒く扱へば、息の根も絶え易い、その代り、懇切に養へば最も能く馴づく仔羊の如き心に食物を与へ、寒い時には温みを与へ、暑い時には之を涼しうし、横道に踏み迷はんとする時は、之を呼び止め

て、正道に反らし、有らゆる方法を用ゐて正道に従ひ養育するの意」（同上、二二～二三頁）とする。つまり、新渡戸の「修養」概念とは、「心」を「正道に従ひ養育」し、その「心が主」となり「克己」することによる自己支配と規定されるものであった。そして、新渡戸は、「克己の最上」として十字架の耶蘇を挙げ、「己の命を捨てゝ始めて大なる命を得、小我を捨てゝ始めて大我を得るのである。克己して己に克ち終へた時、始めて真の己に達する」（同上、一四〇～一四一頁）とする。「大なる命」、「大我」の獲得が「克己の最上」であり、それは「犠牲」とも言い換えられ、また、「道」に従うことと同義でもあった。「動機正しく、外部の道と己の心とが吻合し、勉めないで其為す所が道に中る」（同上、一四〇頁）。新渡戸の「修養」概念とは、「心」に「道」を内在化し、その「道」を日常のなかで顕在化させることによる自己支配といえよう。このように、「修養」概念の根底には、彼の内面的な信仰が大きな意味を有していたのである。[1]

さて、ここで新渡戸の「宗教」概念をみてみよう。彼は「神に接して力を得、之れを消化し同化して、現はす力」（「宗教とは何ぞや」『人生雑感』全一〇、二一頁）と定義するが、この定義を見ると、「修養」概念と変わらないことに気づくであろう。新渡戸は「宗教」と「修養」とを同義と捉えていたと考えられる。ところが、次のことばは、新渡戸が「修養」と「宗教」とを区別していることを示している。

> 修養と云ふ言葉は七、八年前に大いに流行した。僕は其の当時或る雑誌記者に向ひ、修養を説くことは必要有益である、然し修養論は十年も続くまいと思ふと話したことがある。蓋し修養は云はば円満なる常識の如きものであるから、考の土台から築き上げようと思ふ者は到底之を以て満足しない。（中略）修養を以ても満足しない者は、人間の深き高き欲望を達するが為めに、最後の解決を宗教に求める事になる。（「修養より宗教へ」『人生雑感』全一〇、九二頁）

これは大正二年頃の発言とされる。[2] ここで、彼は「宗教」を「修養卒業者の入り来る可き精神界」（同上、九二頁）と把握している。それでは、新渡戸は「宗教」と「修養」との関係性をどのように考えていたのであろうか。次章では、彼の「宗教」概念について、彼のクェーカー派の理解をてがかりに検討してみよう。

二　クェーカー派理解と「宗教」概念

新渡戸がクェーカー教徒になったのは、米国に留学中の一八八六（明治一九）年、ボルチモアのクェーカー集会、ボルチモア友会の会員として認められた時であり、それ以降教徒として一生を終えている。クェーカー派の礼拝は「黙座冥想を主とし、各自直接神霊に交はる」（「友徒」『帰雁の蘆』全六、一三九頁）神秘主義的傾向に特徴があり、新渡戸はクェーカー派から「宗教は外部の形式にあらで内心の働きである」（「友会徒の生活」『人生雑感』全一〇、

二三頁）ことを学んだと回想している。

新渡戸はクェーカー派をどのように理解したのであろうか。彼はその教理について、「自分の心に省み良心に質して、正しいと思へば何処迄も遣るといふ事である。根本は心である。心が正義とし、是なりと信ずる所を行ふ」（同上、二九頁）と述べ、「心」に行動の判断基準を置くことにより、人間の自律的な主体形成を図るという理解を示している。彼は、その「心」を次のように把握していた。

われわれを赦したり告発したりできる一つの〝力〟が宿って働いている。この力が活動をやめると、われわれはすっかり暗黒となる。聖書は〝彼〟を称して「世に来たりてすべての人を照らす〝光〟」という。この〝力〟には生長力があるから、ジョージ・フォックスはこれを「〝種子〟」とよんだ。フォックスとその信徒は、またこれを「〝内なる光〟」と名づけた。（「沈黙の時間」『随想録補遺』全二、二一六頁）

「光」とは、キリストの象徴として用いられており、「一実り多い大木に生長する力一を秘めた善の種子」（「修養と抑制」『随想録補遺』前掲、二一〇頁）を意味した。クェーカー派は、贖罪よりも「神のひとり子」としてのキリストを強調する点にその特徴がある。

新渡戸はクェーカー派の創始者、ジョージ・フォックス（George Fox, 一六二四～一六九一）が「内なる光」と呼ぶものと同じ類のものとして、ソクラテスのダイモン、仏教における涅槃や寂滅、禅宗、道教、王陽明の良知を挙げ、「内なる光」は洋の東西を問わず、存在すると把握する。（「日本人のクェーカー観」『日本文化の講義』全一九、四一二頁）そして、これらに共通する点として、新渡戸は「宇宙意識」（cosmic consciousness）[3]を見いだす。彼は「宇宙意識」を「人間がじぶんはひとつの〝神霊〟であり、また、自分の〝神霊〟は〝宇宙の神霊〟と深い霊的交渉をもつということを、疑問の影をこえて確信する経験」（同上、四一六頁）とした。「自分の〝神霊〟」とは、先の「種子」、「内なる光」と同意であり、「霊的交渉」の結果もたらされるものは、「新しい精神的な力」、「心の純化」（同上、四二〇頁）であった。それは、まさしく個と全体との一体化のありようであり、このような体験は、「黙座冥想」において達成されるべき境地であった。

以上のように、新渡戸は「心」に「内なる光」が内在すると把握する。その光の特徴は普遍性であり、人種や老若男女を問わず、万人に平等に宿る点にある。新渡戸は万人の「心」には生まれながらにして「内なる光」、「種子」が共通して内在すると認識し、人間は例外なくキリストとともにある存在と理解した。

しかし残念なことに、日常の生活では、「種子」の存在を私たちは認識することが難しいという。

ただこのふしぎな力は、われわれ自身の内で隠れ、挫してしまうことがあまりに多い。われわれがこの種子を十分注意

して栽培しないからである。この種子が己れをあらわす適当の機会を与えられないのである。われわれはその声を聞かぬふりをする傾向がある。その声は聞こえるように語っているのに、われわれが注意しないのである。（「沈黙の時間」前掲、二一六～二一七頁）

「種子」は「隠れ」ているのであり、「栽培」すること、育て養うことを通してはじめて人間の前に立ち現れる存在なのである。人間は「種子」を養育することにより「神」との邂逅を果たす。「何をするにも、一寸自分の心で神様に伺ってから、善いと思へば遣る。」（「友会徒の生活」前掲、三一頁）このように、人間の行動の基準に「種子」を通じて出会った「神様」を置くことは、「正義の為めには決して何者をも恐れない」（同上、二九頁）という不動の信念を生み出す原動力となり、キリストとともに生きるあり方であった。

さて、このようにクェーカー派を理解する新渡戸は、「宗教」を「学理の外に超然たるものなれば、哲学や神学や科学を以て、之れを解釈することは出来ぬ」（「宗教とは何ぞや」『人生雑感』前掲、一四頁）といい、「宗教」を理解するには「理性に由つて解き能はぬものを信ずる一種の剛き意志」（同上、一六頁）が必要であると説く。また、新渡戸は「宗教」を「意志の働きなり」とも規定し、「一度基督を信ずれば、如何なる迫害に遭ふも、たとへ其の身は滅さるるに至るも、之れに忠信ならんとする、其の意志の力」（同上、一六頁）の意とした。「意志」という一点において、はじめて神は人間の前に立ち現れるとされたのである。

新渡戸は「宗教」を「意志」によって「信ずる」ことに踏みとどまるのではなく、「神の意に違はざる行をする」こと、実践することによってその極意に達すると理解する。ここに、キリスト教実践倫理を見いだすことができよう。新渡戸は、「宗教」の働きを次のように規定する。

学者の知らない一の力が、人間の精神に入つて、其れが精神の糧となる、精神はこの糧を得て之れを消化し、之れと同化する。其の働きが宗教である。宗教は力である、あらゆる物を集め来つて、神の力に由て之を消化し、形に現はす働作である、斯く消化したものは愛の形を取つて現はれる。（「宗教とは何ぞや」前掲、二〇頁）

「力」とは、「心」に宿る「種子」、「内なる光」を介して神と邂逅することによって得られる「力」であり、人間がその「力」に従うこと、神の御旨を常住坐臥の行動に表すことが「宗教」の意と解されたのである。人間と神との交わりは、「自分の心、即良心の声に耳を傾」（「現代の日本社会の欠陥と青年会」『人生雑感』前掲、一〇五頁）け、「内なる光」に忠実になることによって実現する。そして、「神の意」は実践を通じて具現化される。それは自己と他者を結びつける「愛」、「友情」であり、それを基盤とする社会を構築することによって「神の意」は可視化されるのである。

以上から、新渡戸の「宗教」概念とは、「種子」、「内なる光」を媒介として人間と神との一体化を遂げた後、社会への実践を通じて「神の意」を表すことであった。これは、まさに「修養」概念と同義といえるだろう。

三　「修養卒業者の入り来る可き精神界」としての「宗教」

次に、「宗教」が「修養卒業者の入り来る可き精神界」として捉えられる場合の新渡戸における「修養」と「宗教」との関係性について検討してみよう。彼の「修養」概念にある「心」を「正道に従ひ養育」するとは、「善」の本性を「促す行為」であり、「自我の発達」、自己の「能力を拡大」することと理解された。

われわれの内には二つの本性が宿っている。二つの原理が、われわれの心の戦場で互いに戦闘を交えている。一は悪であって、その力を張るほど強く、われわれを圧倒することさえある。他は善であって、優にやさしく、配慮を加えなければ生長することができない。悪に抵抗する行為と称して、〝抑制〟、〝自己犠牲〟、〝自己放棄〟、〝自制〟という。（中略）以上の考えに反して、われわれのより善き本性を促す行為がある。それを唱える者はいう、「あなた自身の自我を発達させよ。あなたの能力を拡大せよ。あなたのもって生まれた力を、すべて自由に活動させよ」と。これを称して〝修養〟といい、〝自己表明〟という。（「修養と抑制」前掲、二一二頁）

「自我を発達」、「能力を拡大」するとはどういう意味なのか。それは、「良心本心に基督の種子があつて、之を育てれば、即ち善を好み悪を憎むの観念、神を畏れる観念となる」（「クリスマスに就て」『人生雑感』前掲、一四七頁）や、「内なる光は永続的でありにくいから常にその器である良心を養わねばならぬ」[4]という表現から推測するに、「修養」とは、「内なる光」、「基督の種子」さらに「その器である良心」を養うことを意味している。これが新渡戸における「修養」概念のもうひとつの意味であったのである。

新渡戸は、この「修養」によって養われるべき「良心」と「宗教」との関係を次のように述べている。

良心の声、これを明らかにするのが神の霊である。宗教の最も大切な点は、この良心の声を最も明らかにする事である。すなわち、インナーライト（心の内なる光）を認めることである、と友会徒は説くのである。[5]

新渡戸は、「宗教」の重要性を「良心の声を最も明らかにする事」、すなわち「内なる光」、「基督の種子」を認識することという。「宗教」とは自己と超越なるものとの一体化を保証するものであり、「修養卒業者の入り来る可き精神界」とされた。「基督の種子」を認識することである「宗教」とは、「基督の種子」を人間の前に立ち現れさせることによって可能となる。そうするためには、「隠れ」て存在する「基督の種子」を育て養う「修養」が

必要とされたのである。

おわりに

以上の考察から、新渡戸における「修養」概念には、「宗教」概念と同義の場合、ならびに「種子」の養育を示す場合とがあることがわかった。

新渡戸の修養言説は、その読者の信仰に関わりなく、広く青年層へ向けたメッセージ性を持っていた。そのメッセージ性とは何であったのか。新渡戸が「宇宙意識」を諸宗教の共通点と指摘していることから明らかなように、彼は「宗教」の普遍性を認める。新渡戸の修養言説は、人間存在において超越なるものの意識化を強調することだったと考えられるのではなかろうか。それは、人々をキリスト教という特定の宗教へ導くというよりも、むしろ「宇宙意識」を認識する「宗教」を人間存在の根拠として青年たちに自覚させることを主眼に置いていたと考えられる。そしてその「宇宙意識」を人間の行動の起点とすることにより、自律的な主体形成を行おうとしたのであろう。

○本稿は、二〇〇七年三月にお茶の水女子大学に提出した博士論文『新渡戸稲造研究―その修養論を手がかりとして―』の第二、第三章を加筆修正したものである。

○本稿における新渡戸稲造の著作の引用は『新渡戸稲造全集』教文館（一九六九～二〇〇一）による。本文中では、著作名、巻数（全と略記）、頁数を記載した。

(1) 新渡戸の「修養」概念については、拙稿「新渡戸稲造における「調和」―「修養」概念をてがかりとして―」『日本思想史学』三六号（二〇〇四、日本思想史学会）を参照されたい。

(2) 大正二年ごろ、東京帝国大学における基督教徒の会合での発言。

(3) 「心の居り所」『人生読本』（『全集』一〇巻、二二五頁）では、「宇宙的自覚」と表現されている。

(4) 「友会の使命」角達也『友を頂く』no. 35 一九八三年、二頁

(5) 「人生は宗教なり」同右、三頁

（もりかみ・ゆうこ、近代日本思想、お茶の水女子大学比較日本学研究センター客員研究員）